

艦隊が編隊を組んで
やってきます！

乃々乃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鎮守府では毎日楽しいことがいっぱい！

笑顔が絶えない職場です♪

よろしければ少し覗いていかれては??
日々の疲れが取れるかもせんよ?

『任務艦 大淀』

提督がクツソ変態な艦娘たちに迫られストレスと悲しみを抱きながら進むハートフ
ルストーリーです。

目 次

| | | | |
|--------------------|----|---------|------------|
| 春（第一話）は曙 | 説 | 感度3000倍 | 慰安艦娘と化した望月 |
| 島村卯月ガンバリマス!! | | | |
| 空はあんなに青いのに： | | | |
| ミスター味つ子☆ | | | |
| ビッチの流儀 | | | |
| 暗躍つ！艦これシヨタ喰いシスターズ★ | 27 | 17 | 13 |
| (偏見) | | | 7 |
| シヨタ食いシスターの子育て | | | 1 |
| シヨ(r y) | 34 | | |
| ダメ駆逐艦更生機(提督) | 39 | | |
| 一航戦のヤバイほう | 45 | | |
| 終わりの話 | 55 | | |
| ワンクールのレギュラーよりも一回の伝 | 60 | | |

朝潮の拳
93 81 70

春（第一話）は曙

世界はある日突然海から現れた存在により地球の七割を支配された。海路が断たれありとあらゆるものが狂い、世界は大混乱へと包まれていく……突如現れた侵略者に対して世界は攻撃を開始、しかしそれはまつたくの無駄であつた。

人類同士が殺し合いのために作り上げてきたご自慢の兵器はその侵略者たちを何一つ傷つけることが出来なかつたのだ。

如何なる攻撃も通じない敵、只々こちら側が消耗し犠牲者を出すという悪夢。このまま人類はなにも抵抗出来ずあの侵略者たちに支配され滅ぶのだろう、誰もがそういう思い絶望へと飲まれていつた。

——そう、彼女達が海から現れるまでは——

「艦隊帰投したわクソ提督つ!!」

執務室の扉が乱暴に開かれたと同時に幼い少女の大声が響く

彼女はそのままズカズカと前へと進んでいき多くの書類が置かれている机の前で止まつた。

「ちよつと!! わざわざ遠征に行つて資材を手に入れてきた私に挨拶のひとつもないわけ!?」

バンツと机を叩いた彼女は黙々と書類を処理している青年を睨みつける。

つま先立ちを顔を寄せるその距離はあと少しで鼻が触れそうな：いやグイグイぶつかつていた。

「フンッフンッ…!! ちよと聞いて…クフツ…んの?」

時より鼻を引くつかせ、まるで匂いを嗅ぐような仕草を繰り返す。

「…」苦笑だつた曙。」

クソ提督と呼ばれた青年は視線を彼女、曙に合わせることなく短く返事を返す

そして少し椅子を引き彼女から距離をおくと紅茶へと手を伸ばし口にした。

「まったくエース級の働きをするこの私を遠征になんか出してどういうつもりよ」

フンツと鼻を鳴らす彼女は偉そうに腰に手を当て少し膨らんだ胸をこれでもかとい

うほど張つてみせる

それを見た青年は短くため息を漏らした。

「…氣のせいだろうか、青年がため息をした瞬間彼女が深く深呼吸したのは
「この鎮守府では遠征は当番制だ、エースだろうがなんだろうが関係はない。」

「わかつてるわよそんなの！」

なら言うなよなんて文句も出てもいいものだが彼は特に気にする様子も見せずに話を続ける。

「曙、遠征の報告をしたまえ。」

青年は曙へ視線を向け遠征での成果報告を早く報告するよう促す

机の上に広がる多くの書類を見るにあまり無駄に時間を使えるような状態ではない
のだろう。

「ああ…報告ね。」

提督の言葉に少しムツとした表情をした彼女だったが、すぐに表情を変えまるで今から
悪戯をして困らせてやろう、そんな表情を彼に向けた。

「一時間半の遠征を行つてえ…成果はあ…」

「ゼロよ」

予想外の報告により提督の表情少し強張る。それを見た彼女はにんまり顔を歪め、楽しそうに興奮したように提督へと近づいた。

「結構いっぱい手に入つたけど全部お金に換えてバケツにしてやつたわ!!」

「…曙、我が鎮守府はかなりの資材不足。逆に高速修復材は有り余っている状況なのだが？」

どういうつもりだ、提督そんな視線をぶつけたが彼女はまるで気にする様子もなく提督へと近づいていき…

なんと執務机の上へ乗つたのだ。

「あらあクソ提督もしかして怒つた？怒っちゃた??」

「そうよね、勝手に資材売つて不必要なものに変えてきちゃつたんだものね！」

机の上へ上つた彼女はギラギラとした目で提督を見下ろす。その提督はなにも言葉を発することなくまるで曙が何がしたいのかを早くいうようなそんな視線を送つていた。

「言われたことが出来ない子にはお仕置きが必要じやない？」

……さあ私のお尻を引っ叩きなさいよッ!!!
 まるで吠えるように叫んだ彼女は机の上で四つん這いになり提督へとお尻を突き出した。

「さあツ早くツ!! ハア…ツ ハア…ツ 私のお尻をオ」

興奮しきつた表情を向けてくる彼女に提督は酷く疲れた顔をしてみせる。

「…後で始末書を書きたまえ、反省するなら今回はそれ許して…」

「じらしてんのっ!! 早くしなさいよつ早くしないと私ひどいわよッ!!」

どうやら提督の声は耳に入つていないようだ、ふりふりとお尻を振りまだかまだかとアピールする曙に対して提督は面倒くさそうに舌打ちをした。

「机から降りろ。私は早く書類を片付けたい…」

「アンタがその気なら私にも考えがあるわ!! やらないなら今ここでえ!!
 叫んだ曙は自分の下着をズり下し

「オナ n…」

6 春（第一話）は曜

スパアアアアアアンツ

んほおおおおおつ!!

鎮守府は今日も平和です！（大本営発）

ちなみに執務室は突如発生したスプリンクラー（意味深）の故障により書類等に甚大な被害が出た模様。健闘を祈る。

島村卯月ガンバリマス!!

突然だが提督の朝は早い。

まあそれも当然だろう。いつ何時我が國の海に危機が迫るか分からぬ今、その防衛の最前線にいる彼に無駄な睡眠を取らせている暇はないのだ。

—マルゴマルマル—

シンツと静まり返る少し冷たい空気を感じながら提督は閉じた目を開く

それと同時に時計の秒針は数字の12を指した。

氣怠そうに身体を起こした彼は軽く溜息を吐きそして口を開いた。

「何故私の寝室にいる…

榛名。」

「はいっ榛名は大丈夫です♪おはようございます提督。」

とても美しい笑みを浮かべながら戦艦榛名は提督へ挨拶をした。

「今日は天氣が良いのでお洗濯しましよう♪」

フリル付きの可愛らしいエプロンを付けた榛名は綺麗に折りたたまれた寝間着を胸に抱え笑つて見せる。

「スゥーッ… モガモガ… ムフウ…」

そしてさも当然のように提督の目の前で寝間着を自身の顔に押し付け大きく深呼吸してみせた。

その行動には一つの迷いもなく常習的に行つていること見て取れる。
数十秒に渡る提督の匂いを細胞一つ一つ行き渡らせる行為を終えた彼女はどういう

原理なのかは分からぬが身体中からキラキラを出しながら提督に一言。

「榛名は大丈夫です!!」

いや、問題だらけです。

文句の一つでも出ててもいいものだが提督は怒ることもなく榛名へと質問を投げかけた。

「…榛名、貴様は一週間執務室、提督室への立ち入りを禁止されていたはずだ。なぜここにいる」

「はい！先日のスプリンクラーの故障で”皆さんの溜まりに溜まつた出禁命令の書類”が全て駄目になつたと聞きました」

どうやら彼女の中では書類が水浸しで読めなくなるとその効力は無効になるらしい。

これぞ正に水に流すというヤツなのだろうか、まあそんな馬鹿な話があるはずないの

だが…

「書類が無くなつても処罰は有効だ馬鹿者…大人しく部屋に帰りたまえ。今日は出撃も遠征ないはずだ、しつかりと身体を休めなさい。」

早く出てけではなく、身体を休めなさい。

この言葉から彼なりの優しさが見て取れる。出禁命令がでているものの大切な休日

に朝早く来た彼女を強く拒絶出来ないのだろう。

紳士的に部屋からのご退出を願う提督だが榛名は一生懸命に自分が出来ることならお手伝いすると提督に懇願する。

「お願ひです提督！久々にこうして会えたのですから榛名もつと提督とご一緒したいです」

久々に会えた、そう言う彼女の顔はとても必死そうだった。

ここに来れなかつた日など5日程度だろう、しかし彼女にとつてその“程度”はとても耐え難いものだつたのかもしれない。それこそ提督から言われた処罰を無視してしまふほどに

「（…）に榛名がいては迷惑でしようか…」

提督に縋るように問いかけてくる榛名を優しい彼が拒絶出来るはずもなく、小さく溜息を吐いて

「…好きにしろ」

と、一言呟いて部屋の椅子に腰かけた。

「ありがとうございます！ 提督は本当にお優しいのですね♪」

パアツと花が咲いたように微笑んだ彼女はトコトコと提督の近寄りいつもの定位置、彼の斜め後ろに陣取つた

「まだ業務開始時間には早いですね、紅茶お淹れ致しますね」

「ああ、では頼む。その前にすまないが少しトイレに行つてくる」

紅茶を淹れる為にご自慢のティーカップなどを用意をしてくれてている榛名に一声かけ提督はトイレへと向かおうとする

⋮しかし

「ツ!! そのお仕事榛名にお任せくださいツ!!」

提督が席を立ち歩き出そうとした瞬間、紅茶を淹れるため準備をしてくれていた榛名が床に膝立ちした状態で現れたのだ。

ナニ力を口で受け止められるよう両手をお椀のようにして口の下に添える榛名が⋮

「ふあいつ！ ふあるなは らいじょうぶれす!! さあろうろつ!!」

だらしなく舌を出しながら恍惚の表情を浮かべる榛名に提督は酷く冷たい視線を送

12 島村卯月ガンバリマス!!

りましたとき
めでたし めでたし

空はあんなに青いのに…

本日ハ快晴ナリ。

鎮守府の上に広がる空は突き抜けるように青く、まるで空にもう一つ海があるのではないかと思う程だ。

この陽気に誘われたのか多くの艦娘たちが外へ出て来ている。
皆で遊ぶ者、木陰で読書をする者、楽しく談笑する者
各々が好きなように過ごす、なんとも平和な時間だ：

「私が提督のイッチバーン！」

「は？」

「こいつは力を感じる」

（誰かが持つてきた鉄バットを徐に掴みながら

「白露型が1人減るのは悲しいけど仕方ないよね…」

「大丈夫、雨はいつか止むさ（暗黒微笑。）

「「野郎オブクラツシャアアアツツ!!!」」

楽しく殺し合あそぶい光景：：

「はつちやんお勧め本持つてきました。

”未熟艦娘進水祝い 提督のイチモツを添えて”

「はつちやんのご本はいつも勉強になるのね！伊達に眼鏡で似非ドイツ人じやないのね」

「それどういう意味かな：：」

「ろーちゃん知つてるつて！はつちやんみたいな人は”モグリ”つて言うんだつてでつ

ちが…」

「狩頭鎌シユトーレンツ!!」

「でぢつ」

「血みどろパーティなのね！にひひつほらイムヤ、ヒトミとイヨもお股弄つてないでこつち来るの！ニムは…聞こえてないか。」

「あひい」

本を読み自分のベスト濡れ場を語り合い：

「そうすると提督は縛られて抵抗出来ない榛名に

白濁液と黄金水をですね…」

「榛名は毎回crazyな妄想をするね、姉として心配デース」

「むつ、榛名は大丈夫です！金剛姉さまこそどうなんですか??」

「私ですか？しようがないですねえ…ごほんつ、私はティートクと紅茶風呂に入つてお互いの汚れを落としあつて舐め合つテ、もちろん紅茶は後で美味しい：『榛名ドン引きです』 h a a n？」

榛名ア…なにか文句あるデース??」

「f u c k♀y o u」超ネイティブ

「次は私の番ね…」「扶桑姉様!？」

「耳を塞ぎたくなる下品な妄想猥談でも

伊勢、日向には負けたくないの…」

「2人とも…にいないですよ…

…もしかしてただ猥談に参加したいだけじゃ…」

「なななにを言つてるのかしら山城、そんなわけ…

はあ、空はあんなに青いのに…

私、山城のお話も聞いてみたいわ

「ええつ!?わ、私は別に提督となんて別に…その、

キスとか、優しく触れ合つたり抱きしめたりとか…」

「あらやだこの子清いわ…己の獣のような欲望が恥ずかしくなつてきた…」

自分が行いたい変態シチュエーションの話で盛り上がる者達。

あ、なんて平和な日なのだろうか…

提督の実質被害、今日未だ無し。

本当に珍しいこともあるものだ、

そしてもう珍しいことがもう一つ。

「…。」

そう、提督が外へ出て来ているのだ。

ミスター味つ子☆

ある晴れやかな日、提督は久々に執務室から出て来ていた。

ついさつき今まで彼を苦しめに苦しめた狂気的な量の書類がようやく片付いたのだ。心なしか彼の表情もいつもの険しさが緩和されているような気がする。

「：陽射しが眩しいな」

目を少し細めた彼は動かしていた足を止め空を見上げた。

「あら、貴方が外にいるなんて珍しいじゃない。

どういう風の吹きまわし？」

「ん：天津風か、仕事がようやく片付いたのでな。少し散歩をしていたところだ」

声がした方へと顔を向けた彼は清々しそうに返事を返す。

それを聞いた彼女は少し驚いたような表情を見せて「本当にあの量の書類を終わらせたの？凄いを通り越して少し怖いわね：」なんて呟いてみせた。

「あら、貴方少し帽子が少し曲がっているわ。直して上げるから少し屈みなさい」

「いやそれ位自分で『はやくしなさい！』…では頼む」

自分で出来るからと断ろうとしたものの天津風の勢いに負け
彼は片膝をついて彼女の手が届く高さまで頭を下げた。

「いつもより提督の匂いが強い…いいじゃない これでいいわ」

「すまない助かつた」

立ち上がった提督は彼女に礼を言う

「ところで貴方、最近汗は搔いているの？書類仕事ばかりで一日中座っているんじやない？」

「確かに。だがいきなり何故だ」

「毎日汗をしつかり搔かないなんて身体に悪いわ！今日はこの天津風がしつかりと汗を流せるような健康的な生活を送らせてあげる♪」

にこやかに笑つてみせる彼女は私に任せないと慎ましい胸を叩いてみせた。

「おい待て天津風、何を言つて…」

「さあついてらっしやい！まずは鎮守府の周りをランニングよ!!」

〈サア、ケンコウテキナアセヲカイテ イツショニキモチヨクナリマショウ!!

「お疲れ様、お水よ。一つも息を切らさず走り切る…流石ね」

「いきなり走り出す奴があるか…」

天津風から渡させたコップの水を一気に飲み干し提督は息を吐き出す。
彼の表情はいつもと変わらず鉄仮面のようであるが、額からは汗が流れ少し暑そうに
していた。

それをみた彼女は少し嬉しそうに　おかげでいい汗掛けたでしょ?
と笑つて見せた。

「ヒトフタマルマル　お昼ね。安心しなさい!! 昼食もこの天津風特製スペシャル料理を
ご馳走してあげる!!」

少し待つてなさいねと言った彼女は執務室奥にある台所へと消えていく。何故だろ
うなんだかすごく嫌な予感がする: 提督はそんなことを思いながら取り出したタオル
で汗を拭きとつた

「お待たせ、さあたんとお食べなさい!! 天津風の激辛辛撼鍋よ♪」

しばらくすると彼女はグツグツと音のする土鍋を持つて台所から現れる。

鍋敷きの上に置かれた土鍋の蓋を開けた瞬間、大量に白い湯気が立ち上り鍋の中身が姿を現した：

赤

赤だ。

ぐつり…ぐつりと煮え立つ姿はまるでマグマのよう

それを見た提督の表情は今日初めて変化を見せた。

苦渋： おそらくこの言葉が一番今の表情に合うだろう。

眉間に皺を寄せ鋭い眼光で鍋を睨みつける

「さあどうぞ、きっと貴方の口にあうはずよ♪」

天津風は美味しそうに小鉢に鍋の具をよそい提督の前へと置く。

ボタタツと自身の頬から垂れてくる汗を手の甲で拭つた彼はゆっくりと箸を持ち上

げ

「…いただきます」 手を合わせた。

しかしそこから箸が動かない。片手に持たれた真っ赤な汁と具材たちのよそわれた小鉢を凝視するばかり。

これを口にした瞬間自分は一体どうなるのか、見た目からしてこれは人間が耐えられるものなのか？

あらゆる疑問等が提督の頭の中でぐるぐると回り、彼に食べるという行為を躊躇させる。

「じゃあ私もいただくわ。はふっ…んく辛いわね!!でも美味しいっ…はむつ」

だが彼女は、天津風は食べることを躊躇する提督を気にもせずそれを口に運んで見せた。

辛いっ辛いと言いながらも彼女は玉のような汗を零しながら食事を続けていく、すごくいい笑顔で…

それを見た提督は大きく目を見開き、そしてフツと笑つて見せた。

自分は何をそんなに躊躇していたのか。これは天津風が自分のことを想い作つてくれたもの、

それを食べないなんていう選択肢は最初から存在しないのだ。

心の中で すまなかつたと謝罪をした彼は天津風特製激辛辛撼鍋を口に運んだ。その瞬間、まるで身体が燃えているのではないかと思う程の熱さが彼を襲う。身体中から汗が吹き出し、ぼたぼたと汗が零れ落ちていく

「…辛い」

一言そう呟いた彼は再び真っ赤な汁が滴る野菜を口に運び咀嚼し飲み込む。辛い、辛いのだ。今まで食べたことのないほどの辛さ…しかしその中にある旨味がある。

それが箸を止めさせようとせず、もう一口…もう一口と口へと運ばせてしまう。「お鍋の感想はどうかしら？貴方♪」

「ああ…美味しいな」

彼女の問いかけに彼は笑いながら答えた。

(へり) … おゝ激しい

「ふう暑くなつたわねえ」

食事を終え食器を片付け終えた二人はムンムンと蒸した執務室で食休めをしている。ソファーに座り足をぶらぶらと遊ばせている彼女は上着の襟をパタパタとさせ服の中に空気を送り込む。

「窓を開けよう、そうすれば部屋の熱気も逃げる」

提督は天津風の横から立ち上がり窓へと向かおうしたが天津風がそれを止めた

「今日は汗を搔く健康的な生活をする、忘れたの？」

「…しかし暑いのは嫌だろう」

赤みがかつた頬をぶくうと膨らませ怒つたような視線を向けてくる彼女に提督は困った顔をして、

ではどうするのかと質問を投げかけた。

「そんなの簡単じゃない、脱げばいいのよ！」

そう叫んだ彼女はバサアツと自分の服を脱ぎ捨て下着姿になつてしまつた。

黒の紐パンに上に至つては黒い紐のようなもので“先端”のみを隠すという下着とは到底思えない格好をしていた。

服を脱いだせいかフワリと彼女の甘い匂いが広がり執務室に広がっていく

「…はしたないぞ天津風、ここが執務室であることを忘れるな」

服を脱ぎ捨ててなにやらスッキリとした顔をして再び提督の横へと座りなおす彼女に向けて、

彼は少し呆れた顔で注意をする。それに対して彼女は“別にいいじゃない、私は貴方に見られるのなら平気よ”

と反省した様子もなく伸びをしてみせる。

貴方なら平氣：おそらく信頼しているからという意味だとは思うが、提督は男性である。信頼しているからといってあのような格好に平氣でなられてはあまりよろしくないだろう。もしも万が一、万が一提督が欲情し襲い掛かつてきたら彼女はどうするのだろうか。まあ艦娘である彼女に襲い掛かるなど自殺行為に等しいのだが：「じゃあ貴方も脱いじやいなさいよ、そうすれば変じやないでしょ？」

赤信号、皆で渡れば怖くない。

つまり彼女の考えはこうらしい、

「一人だけ下着姿だからおかしく見えるのだ、二人でなつてしまえば普通になつて恥ずかしいという気持ちもなくなる」

うむ、おかしな理論だ。

提督は無視して何度も窓を開けようとするものの横に座る彼女に腕を捕まれソファーに引き戻されたり、抱き着かれてまつたく動けなくされるという行為が何回も行われた。

そのせいで元々汗だらけであつた提督の服はさらに汗まみれになつてしまい、気持ち悪そうな顔をしている。

「…ハア、まつたく」

そう呟いた彼は大きな溜息を吐きながら、もう限界だつたのだろう自分が着ている上

着へと手を伸ばしワイシャツ姿になつた。

そのワイシャツも汗まみれで透けてしまつており彼の肌が薄く見えてしまつてゐる。

「やつと脱いだわね！まつたく遅いわ…」

ほんと早くなりなさよね…と小さく呟きながら天津風は横から提督へ抱き着き、胸元に顔をうずめて動かなくなつた。

「おい、なにをしている」

抱き着いて動かなくなつた彼女に対し提督は声をかけるが返事が返つてくることはなく無音が執務室を支配する

その時、

“ジユルツ”

ちゅびつ…ちゅう…ちゅぱつ れるう… ジュパッ!!

なにやら提督の胸元から何かを吸い、舐めるような音が聞こえ始めた。

提督は天津風の頭を掴み自分から放そうとするがまつたく動く気配はない

「…天津風なにをしている」

「べちゅに…んちゅつ ただ流した汗の分ミネラルを補つてゐる れろお…だけよ」

提督に抱き着いた彼女はひたすらに彼のワイシャツに吸い付いたり、首を舐め、ボタンの隙間から“汗を舐め吸い付く”行為に没頭している。

「ねえ…私今から貴方に伝えたいことがあるの…」

「…。」

提督のワイシャツを甘噛みにして汗の味を味わいながら彼女は告げる

「これを聞いたらきっと貴方は気持ち悪いって思うわ…」

提督の胸元に顔をうずめこれでもかという位長く深呼吸を繰り返した彼女は震えた声で話を続ける。

「でも知つてほしい…貴方には…だから言うわ…」

提督の首元の汗を汗を丁寧に舐めとり決意と不安が見え隠れする瞳を彼へと向け、そして口を開いた。

「あのね！私貴方の匂いとか汗とかに凄い興奮するのッ!!!」

「知ってる。」

なんとも冷たい視線で提督はそう返した。

ビツチの流儀

ある晴れやかな一日、鬼の書類作業もなくなり提督はのんびりと通常業務に励んでいた。

「ちーっす提督、鈴谷きたよ~」

突然扉が開いたかと思うと薄緑のセミロングの少女が執務室へと入つてくる。

本日の秘書艦 鈴谷である。

「あ、お菓子置いてある！ いただき～んまつ！ なにこれつ」

入つて来たかと思うと提督への連絡を行うこともなく”間宮、提督に愛を込めて”と書かれた和菓子に手に取りソファーに腰掛け食べ始めた。

「…10分の遅刻だ鈴谷」

「ん？ 別にいいじゃん鈴谷と提督の仲つしょ♪ それともなに～鈴谷が来なくて寂しかったの？」

いつまで経つても報告もせずお菓子をパクつきながら携帯を弄る彼女。提督は呆れた顔で早く報告をしろと促すが、にんまりと笑みを浮かた彼女は提督へと近寄り、肩に抱きついてみせた。

「うりうり～♪どうなん？鈴谷が来ないからて寂しくて仕方なかつたんでしょ～??」
ほんと提督可愛いよね♪

そんなことを言いながら彼の肩を揉んだり、指先で頬をつついたりなど、普通上官に行えば激怒されるような行為を繰り返す。

「…」

「だんまり??あ、もしかして興奮してるとか？うわ～ケダモノじゃーん♪」

何をしても提督が怒らないことに調子に乗った鈴谷はさらにベタベタと身体をくつ付いてみせたり、過剰なスキンシップを続けていく。

「ねえ提督、鈴谷の甲板ニーソ触らせてあげようか？」

「すつごい気持ちいいらしいよ？皆言ってくれるし…

どう？触りたくない??て・い・と・く♪」

耳元で囁いてくる彼女の表情はまるで提督を誘っているようで、とても淫らな雰囲気を醸し出している。

それに対し提督はと/orうとただ無表情で彼女を横目で見るだけである。

「ほらほら、緊張しなくてだいじょーぶだつて…楽しいことしよ?」

”鈴谷に任せて…”

そんな声とともにスルリ…と彼女の手が肩から離れ、提督の身体を伝い徐々に下がつてゆく…そしてあとほんの少しで提督の大切なところへ届きそうになつた時、

「鈴谷。」

提督が片手を上げ鈴谷を止めた。

そしてなにやら服の中に手を入れたと思うと数枚の紙を彼女へと差し出したのだ。
その紙とは…

一万円

金であつた。しかも五枚、五万円である。

「…へ?」

「鈴谷よ貴様も年頃なのだろう、欲しい物が多く金が必要なのも分かつてゐるつもりだ。しかしそ前は私の大切な艦の一人であることを忘れてはほしくない。決して自身を安く売るようなことは止してくれ。金が必要ならば毎回は無理だが私が出資しよう。

さあ受け取るがいい」

優げな笑みを浮かべながらお金を手渡そうとする提督、それにどういう反応をすればいいか困惑する鈴谷。

「あの、提督？ 言われる意味がわかんないんだけど…」「援助交際はやめたほうがいいぞ、鈴谷」

視線を合わせはつきりと告げる提督。

「ハアアアアアア！？ 鈴谷そんなことしてないんですけどっ！！ 経験ないんですけどっ！！ つるつるぴつかぴか新品『ピー』なんんですけどっ！？」

なんの経験がなく、ナニがつるつるぴつかぴか新品かはここで言うのは控えよう。

提督に言われた衝撃的な言葉に顔を真っ赤にして叫ぶ鈴谷、顔から湯気が出るのではないかと思うほどに真っ赤になっている。

ダandanッと地団駄を踏む彼女に対し彼は

「フツ」

いつもよりほんの少し口角を上げ鼻で笑ってみせた。
こやつ確信犯である。

「すまない鈴谷、どうやら私の早とちりだつたようだな。あまりにも経験豊富そうな物言いだつたのでな…少し勘違いをしてしまつた」

「ぐぬぬう！」

今だ真つ赤な顔の鈴谷は怒つた顔をしてみせるものの気恥ずかしさもあり文句が口から出てこない。

まあ経験豊富そうな雰囲気を醸し出し有利な場を作り出そうとして見事失敗、こんな顔にもなるだろう。

悔しそうに唸る彼女を提督が満足そうに眺めている。

「ぐづうううう…提督の、提督の…」

『（ジ）主人様遠征組帰投しました…おや、鈴谷さ』

童貞ちんぽこ先生ツヽ!!』

大声で淫語を叫び、逃げるよう執務室から走り去つて行く彼女。

提督とタイミングよく入室してきたピンクツインテールの少女、漣はその背中を見送つた。

そして暫しの沈黙の後、

「ご主人様が童貞 k t k r ! k t k r ッ!! キタコレエエエ!!」

びよんびよんと飛び跳ね興奮と喜びを露わにする彼女。

目は血走り、口からは涎が垂れ完全にイッてる状態だ…

「ご主人様! 淚とここで一緒に初めてを捨てましょう!」

「…涙、少し静かにしろ…床が抜ける」

こうして提督童貞説が流れ鎮守府全体がしばらくの間お祭り騒ぎとなり、

提督はもう絶対にノリで艦娘をからかうのはやめようと固く誓うのであつた。

一方鈴谷は…

「ぐすつ…うう 提督の馬鹿あゝ」

「はあ、いい加減泣き止みなさいな鈴谷：提督も悪ふざけが過ぎて いるけれど鈴谷もいけませんのよ？」

「だつて雑誌に経験豊富そうに攻めたほうがいいって…」

「貴女にはその雑誌向いていませんわ、大体なんですのその『ギャルの男食い h e a v e n』 つて…」

「駆逐艦の子たち皆、鈴谷の膝枕気持ちいいって言つてくれたのになあ：鈴谷魅力ないのかな…」

「まず自分の言動を思い返したほうがいいと思いますわ：さてと」

「熊野いじわるう：ていうかなんでそんなお洒落してんの？お出かけ??」

「…今日は提督とデイナーですの」

「

おわり

暗躍つ！艦これシヨタ喰いシスターズ★（偏見

皆が寝静まつた深夜、暗い一室にて秘密の取引が行われていようとしていた：

「じゃあこれを使えば提督が…」

「はい！お二人のご要望通りこれを飲ませるとですね…」

渡された小瓶をギラついた瞳で凝視する彼女は説明など聞こうともせず口から涎を垂らしながら妄想の世界へと旅立つて行く。

「一体彼女の頭のなかではナニが繰り広げられているのか…」

「あはは…聞こえてないみたいですね」

「馬鹿め…と言つて差し上げますわっ！」

「ちよつ、高雄さん鼻血！私の研究室汚さないでくださいよお」

「AKSさん私の事はTKOと呼んでください。名前がバレたら色々とマズイです」

ああ～カーペットに…

ボタボタとカーペットに鼻血を流すTKOに悲鳴を漏らしたAKSはすぐさま雑巾を持ち出しカーペットに付着してしまった鼻血の処理をする。

TKOは必死に汚れを落としているAKSを気にもせずティッシュを鼻に詰め、まつたく警戒が足りませんわなどと掃除をしている彼女に対しても小言をいってみせた。

「ATGそろそろ帰つてきなさい、AKSに報酬を渡して明日に備えましょう」

「ふえつ？え、ええそうね高雄『TKO』：TKO、明石ありがとうこれが報酬ね！」涎を拭きながら妄想の世界から無事帰還した彼女は明石：いや、AKSへと男性用のワイシャツを差し出した。

「おっほ！これです、これが欲しかったんですよ！」

スウ～…ンハアアア…これは洗濯前のものですね？香りが違いますよ：」

素晴らしい、最高、イキそ…、そんな単語を発しながらワイシャツに顔を埋めるAKS、どうやら報酬はお気に召したようだ。

それを見たATGとTKOは満足そうに頷くとスカートの中を弄り始めた彼女を一人にして部屋を後にするのだった。

「ンジユ……ンッパ…、すごいわ！本当に飲ませたら小さくなるのね！」

「あ、愛g…ATG早く変わりなさい！次は私の番よ…んちゅ♡」

「ああん…押さないでよ高雄お…」

「ンウ…ちゅ…TKOおよ…ちゅるつ」

「もう…早く交代しましようよ」

「れう…ンhaar… 子供の体温は高いっていうけれど本当なのね。”いつもしている
”時より口の中が熱いかも…」

「そうね〜、でもこの熱い感じ嫌いじゃないわあ♪さ、交代しましょう」
「あつそうだ」（唐突）

ねえATG、いいこと考えたわ。提督にもご奉仕していただきましょう？こう
して…んしょ、”ニニ”に薬を付けて…提督に舐めて頂くの」

「あ、するいわ！私もやるつ」

「私が先♪…やんつ くすぐつたい♪」

「高雄お早く交代しましよう私待てないわ！」

「揺らさないで、提督の目が覚めてしまふわ…私達に子供が出来たらこうやつてしてあ
げるのかしら…ふふつ提督こんなに可愛らしくなつてしまわれて、赤ちゃんのようにこ
んな…ンツ♪なにかしら胸の芯が熱くてなんだか変な感『ヂュウウツ!!』ジイツ!?」

「高雄つ!?」

「いきなりいい！強いです提督、あひつ噛んじや…ンンツ♪なにつ!?先っぽ熱いつ
♪おかしいですッな、ナニカ出て…来ちゃうつ」

んにやああああツ～♡

――――――――――

――――――――――

「ん…」

マルゴウサンマル。

提督は口元に違和感を感じ目を覚ます。

なにやら口の周りが濡れているような感覚がして腕で拭つてみると、寝間着の裾にピンクの汚れと液体が付着した。

なんだこれは：提督は思考を巡らせる

このピンクの汚れはおそらく口紅やリップグロスのようなものだろう、何度かシャツの襟元や首につけられた事があり見覚えがある。

ではこの液体はなんだ？

べろりと口元を舐めてみればほんのりと甘い味と香りを感じた。

「これは一体…??んんつ、あーあー…」

疑問を口に出そうとした時、もう一つおかしな事に気がついた。

自分の声がやけに高く聞こえるのだ。

何度か発声をしてみてもやはり声は高いままだ。

なにかがおかしい、提督はすぐさま起き上がり自身に起きている不可解な現象を探るべくベットから起き上がるうとする…が、

なにやら布が手足に絡まり上手く動く事が出来ない。

ズリズリと身体を動かしてなんとか這い出ることが出来た彼は、両手を上げなにが絡まっているのかを確認してみる、しかしそこには自身の寝間着の裾がだらんと垂れ下がつていいだけであった。

…垂れ下がる？

自分はこんな袖の長い服を着ていただろうか？

寝ている間に服が伸びた…はたして服はここまで伸びるものなのか??

おそらく一番考えらることは、考えたくもないが…

おそらく自分の身体が…

「おっはようございまーす♪愛宕が起こしにきたわあ♡

…まあ提督！そんな小さくなっちゃってどうしたの??」

…縮んだことか。

シヨタ食いシステムの子育て

朝起きると子供になつていた提督。こんなあり得ない状況に頭を痛ませながらも今、自分の身体に起きている不可解な現象を鏡を見て確かめる。年としては小学生低学年くらいだろうか、鏡に映るの姿は提督にはとても懐かしいものだつた。

「さあ提督、お着替えしましょ♪」

そしてもう一つ不可解な点、それは彼女の態度だ。

朝から寝室に乱入してきた愛宕、彼女は小さくなつた提督に特に驚くこともなく満面の笑みを見せるが当然かのように身の周りのお世話を始めたのだ。おそらく彼女はこの現象について何かしら関係していると提督は考えている。

「…おい、下着まで下ろそうとするな」

「でも今のパンツのままじゃ緩くて困るでしよう？えい♪」

考えを巡らせている彼はのズボンをぐいぐいと引っ張る愛宕、やめさせようと引っ張る手をはがそうとするものの子供の力では歯が立つはずもなく、簡単に下着ごと下ろされてしまつた。

いつものように冷静を装っているが、これは少し不味いことになつたなど内心彼は舌打ちした。

この体格差、今襲われたら逃げることも抵抗することも出来ないだろう、ここから導き出される未来は想像に難くないだろう。

彼女も今は無害のように振舞つて提督のお世話をしているが、時折見せる視線が子供を愛おしむものから、獲物がいつ隙を見せるのを待つている猛獣のものに変わる時がある。

下着ごと寝間着を剥ぎ取つた彼女はそれを丁寧に折りたたみ自分が持つてきたカバンの中へと仕舞う。

普段の提督ならば一体なにをしているのかを指摘し、やめさせようと
するだろうが、もし指摘をしたことで彼女が逆上して襲つてきたことを考えて注意するのをやめた。

されるがままの提督はあつという間に着ている服全ても脱がされ丸裸の状態にされてしまう。

なんとか近くにあつたシーツをなんとかひっぱり下半身だけは隠せるようにはした
が…

「…あらあら、じゃあこれに着替えましょ…」

下半身をガン見しながら残念そうな顔をする愛宕は、気を取り直すように手を叩きあ
る物を取り出した。

子供が着るほどの軍服である。

「…これは？」

「作つたわ」

なんの迷いもなく自作の服を取り出した愛宕、容疑者から犯人になつた瞬間であつ
た。

服を持ちズイズイと迫つてくる彼女を鬱陶しそうにするが裸よりは服を着たほうが
マシという判断を下し、提督は愛宕の手を借りながら服に袖を通すことにする。

「バツチリだわ！ 提督、とても可愛い…んしょつ」

お手製の軍服に身を包んでいる彼を満足げに見つめる愛宕。

可愛い可愛いと何度も言つたかと思うとにこにこと笑いながら提督を抱き上げてみ
せた。

「……!? おい、離つもがが…」

あまりにも自然過ぎる動きは彼ですら抱き上げられて十秒程度はなんの違和感も感
じずに受け入れてしまうほどで、気づいた瞬間すぐさま離れるためジタバタと暴れてみ

せる。

しかし、いくら抵抗をしようとも離れることは出来ず、圧倒的過ぎる肉の塊に顔を挟み込まれてしまう。息苦しさと彼女の甘い匂いの一重責めによりだんだんと力が奪われていく状況に焦る提督。

このままいけば彼が捕食者ブレデター（性的に）いただかれてしまうのはほぼ間違いないだろう。

身体が小さいというのはここまで不利になるとは…と、今の状態に嘆きながら彼は深い闇の中へと落ちていき…

「ちよつと愛宕ズルイですわ!!」

意識を引きずり込まれるような感覚に身を任せようと瞳を閉じた瞬間、大声とともに扉が乱暴に開かれ一人の女性が現れた。

高雄型一番艦、高雄である。

「あら高雄：もう母乳は止まつたの？」

「母乳パツドを使つてゐるわ…」

「ごほんつ愛宕！提督のご迷惑になることはやめなさい」

いつもより顔を赤くした彼女は愛宕から提督を取り上げ自分の胸の中へと抱き寄せた。

「ツハア…助かった。しかし高雄遅刻だ…珍しい」

「うつ…それは提督があんなに強く吸うから…すみません…」

――――

――――

愛宕の拘束から解放され、ようやく執務室へと辿り着く。

邪魔をしていた本人はというと提督の後ろに立ち、ここにこと笑いながら鼻歌を歌つていて。…どうやら反省などしていないうだ。

「提督、どうぞホットミルクです」

「ああ、ありがとう…んっ」

ハア…と溜息をつき疲れた表情の彼の前にマグカップが差し出される。どうやら高雄が気を利かせて飲み物を淹れてくれたようだ。

提督は一言礼を言つてから受け取りカップに口をつける。

子供になつた提督に気を遣つてなのかホットミルクは人肌ほどの温かさだつた。

「フウ……フウ……高雄のミルクを、提督が……」

「ぶうく……高雄だけズルイわあ、私も出ないかしらあ」

両手でカップを持つて高雄特製ミルクを飲む提督に鼻息を荒くしている高雄は、興奮を隠しきれない様子でもじもじと太ももを擦り合せながら自分の豊満過ぎる胸をギュッと抱きかかえて体を震わせた。

それを見ている愛宕も羨ましそうに呟くところまた大き過ぎる乳肉へと手を伸ばし搾るような手付きで自分の胸を揉み始めるのであつた。

「あつ……また出てきて……交換しなきや」

「……？」

ホットミルクを飲み終えたのと同時に高雄は胸を押さえながら少し失礼しますと、小走りで執務室から出て行つてしまい提督はそれを不思議そうに見送るのであつた……

ちなみにいきなり胸を揉み始めた愛宕には冷たい視線を送つた提督なのでした。

シヨ（ry）

終わりの話

高雄が執務室から飛び出してから数時間が経つた。

戻つて来ない彼女のことが気になるものの先に自身の仕事を終わらせてから考えようとした彼は、さつそく提督はいつもより高い椅子になんとか腰掛けると机の上に置かれた書類へと手を伸ばそうとする

が、

「あら…届かないんですか？ふふ、じゃあこうしましょ♪」

小さくなつてしまつたせいで机の上にある書類に手が届かない。

なんとか取ろうと苦戦しているその姿に愛宕は顔を綻ばせると、提督を後ろから抱き上げて自分が席に座り、膝の上に座らせる。

提督はなんとも言えない表情をするも膝の上に乗つたおかげで書類に手が届くようになつたため何も言えずこのまま仕事をすることとなつた。

そして現在の時刻はヒトヨンマルマル過ぎ。

途中で昼食休憩をはさみつつも黙々と書類に目を通していく、机の書類は既に半分以下となっていた。このペースならばあと二時間ほどで今日の仕事は片付くだろう。

提督は次の書類を読むために一度手に持つが、何故かまた机の上に戻す。

「んむう……？」

仕事を始めて数時間、目を軽く擦り小さく欠伸をする提督は大人になつてから久しく感じていらない強い眠気に襲われていた。

体が小さくなつた影響なのか、なんとか負けないよう頭を振つたり伸びをして眠気を醒まそうとしてみるが効果は薄く、少しすると無意識に船を漕ぎが始まってしまう。

「…提督、お眠ですか？」

眠そうにしている提督に気がついた彼女は提督のお腹に回いた手を一定のリズムで優しくポンポンと叩いてみせる。

それは母親が小さい子供も寝かしつける時のそれと同じもので、いま必死に寝ないよううに頑張っている彼にとつては非常にやつて欲しくないものだ。

「大丈夫よ、ほら…ゆつくり目を閉じて…ね？」

愛宕は耳元で優しく囁くと片手で提督の両目を覆う。ほんの少しのところで耐えていた提督は視覚からの刺激を失つたことであつという間に心地よい闇の中へと落ちて

いつた。

――――――――――

ベッドの中、心地の良い微睡みのなかを彷徨つていた彼はしゆるりと布が擦れる音でゆっくりと意識が覚醒していく。

しばらくすると音は聞こえなくなつたが、ぎしりと彼が眠るベッドが軋み何者かがベッドの中へと侵入して提督の身体に抱きついた。

むぎゅり、と服越しでは感じ取れない肌と肌同士の触れるぬくもりと柔らかさに提督は今自分が何も衣服を身につけていないことに気がついてしまう。

柔らかく甘い香り、優しいぬくもりにまた意識を持つていかれそうになる提督だつたが、先ほどから腹部の辺りを指が這うように動かされ眠気より不快感のほうが勝り、短く呻き声をあげると彼は機嫌が悪そうな顔でゆっくりと目を開いていく。

そして目の前には案の定、服を全て脱いだ愛宕の姿があつた。

「…んう、愛宕…擦つたい、やめろ…」

提督は厭らしく胸元を撫で回している手を掴むと不機嫌そうに彼女を睨みつける。

「いやだつた？じゃあ…ぎゅ～つしてあげるわあ♡」

寝ぼけ気味の彼を見た愛宕は、このまま主導権を握り続けられるよう掴まれていないもう片方の手を素早く提督の腰へと回しさらに密着する。

大き過ぎる胸に埋まり苦しそうな声を上げた提督だつたが、何度も頭を動かした後、胸に顔を埋めたまま動かなくなつた。

「…？」

いつもならここで必死に抵抗してくるはずの提督が何故か大人しくしていることに愛宕は不思議そうにするも、すぐにハツと表情を変えて自分なりの答えを導き出した。

「つまりこれは…OKつてことね？ 提督！」

抵抗しない＝合意のサイン

強引に致しても感じたら和姦的な発想を展開した彼女は、大人しくしている提督はこれからするであろう行為を受け入れたと勝手に判断を下していた。

「やつた♪☆愛宕ちゃん 大 勝 利♪♪

高雄ごめんね、私一足お先に大人になるわ…でも貴女もいい思いしたでしょ？ 提督に

あんなに飲んで貰つたんだから：これでおあいこにしましよう、そう大人らしくね）

今だ溢れ出て止まらないアレを搾つている高雄のことを考えながら、大人びた表情の愛宕は自分の胸元にいる提督の”ある一点”を目指しゆつくりと手を下に伸ばしていく

く

目標への着弾まであと5秒：4、3、2：1

着d：

「なあ愛宕：お前たちは私に不満があるのか？」

「ふえつ！」

今まさに提督のティクトクに触れようと指を曲げようとした時、不意に声をかけられた

愛宕は変な声を出して手を引っ込んだ。

「へ、あの提督…？」

「不満があつて私をこのような姿にしたのだろう？…私はこういう性格だ、無意識のうちにお前たちに嫌な思いをさせてているのかと思ってな」

小さくなつた影響なのか、普段なら決して聞けないような言葉を口にする提督に愛宕は目を丸くするが、すぐにふわりと笑顔を浮かべた。

「ふふつ…不満なんてあるはずないわあ？だつて私達は提督のこと大好きなんだもの。

まあ少しは甘えてもらいたいって思うこともあるけど」

「じゃあなんで…」

優しく頭を撫でながら提督は愛宕に今回の事件の真相を聞く。
なぜ自分は小さくされてしまったのかを知りたい提督は愛宕の胸に顔を埋めながら
見上げるように視線を向ける。

「ああ：それはね？」

提督とおねショタ精通プレイをしたかったの」

「私たち最近、提督のためにどんなプレイでも答えられるように色々勉強してるの。で

も普通にシてもここにはいっぱい可愛い子がいるからすごく思い出に残るようなプレイがしたいなって」

ほら私達って他の艦娘の子たちと比べてショタ提督モノのエロ同人誌が多いじゃない?だからここはピッグウェーブに乗つてみようかなつて高雄と話になつて……

得意げに話す愛宕を死んだような目で見上げる提督は何も喋ることなく只々、彼女を見つめる。その視線はいつも彼が変態行為に及ぼうとする彼女たちに向ける呆れや悲しみのものではなく、ほんの少し怒りが混じつているように見えた。

「大丈夫!この日のために色々な資料(エロ同人誌)を読み漁ってきたから……ふふつ、すぐぐにピュツピュツさせてあげるからねえ……♡

まずはえつと…授乳手〇キ?をしてあげる

高雄みたいにおっぱいは出ないけどきつと満足させてあげられるわあ!さあ提督、愛宕おねえちゃんに任せて…『かぶツ』あひやあんつ!?

へつ!?て、提督?だ、ダメでしょ?そんな強く囁んじや…んひつ♡

「…ああ、ごめんね愛宕おねえちゃん。加減がわからなくて…でも仕様がないよな?小さい子供なんだから」

提督はギロリと愛宕を睨み付けるとごろりとベットを転がり馬乗りの体勢になる。ついに提督がキレた。(無慈悲な鉄槌)

「……こら！おねちゃん怒るわよおおんぎいつ?!あ、だめっ強ついいいんつ……ハア……」

「どうした？愛宕お姉ちゃん、ちゃんと教えてくれないとわからないぞ？……まあ教えてもらう前に私がなつてないお前の躾けをきつちりしてやるがな。……覚悟はいいか？」

愛宕

「は、はひつ」 びゆるつ



後日

「愛宕、報告書に誤字がある。書き直し」

「は、はいー」

「高雄、最近お前たちの消耗品申請の数が他の者と比べて多過ぎるのだが」

「あ、あの…下着を…」

「まだダメか」「ハイ…」

「明石、この薬品の購入申請はなんだ?」

「あ、ああ、これは…」「却下だ」「アツハイ」

あの事件からしばらくが経ち提督は薬を盛った主犯2人と薬の製作者に制★裁を与えた普通の生活へと戻っていた。

まあ小さくなる薬は作つたくせに戻す薬は作つていなかつたということが判明し色々と苦労があつたお話はまた別の機会にしよう。

「…愛宕」

「は、ハイっ…あつ」胸に染みじわり…

「…すまないが少し間愛宕と席を外す、書類整理を頼んだ」

「て、提督!あの私ももう…ツ」

「…明石、書類整理…出来るな?」「アツハイ」

ガチャリ

「…」カリカリ

「…」カリカリカリカリ

「…」

「母乳促進剤

これは売れるツ!!!」

完

ダメ駆逐艦更生機

（提督）

「これで本日の任務はあらかた終了ですね、お疲れ様でした」

「お疲れ様、いつも手伝わせてすまない大淀」

午前中までにある程度の任務を完了させた提督は大淀と一緒に廊下を歩く。

長い黒髪に眼鏡、セーラー服のような姿をした彼女は眞面目そうなクラス委員長を思い立たせる。実際、この鎮守府の任務等の管理は提督と彼女が行なっているため委員長ポジションはあながち間違つていなかもしれない。

まあ、基本的に眞面目な性格の彼女であるのだが……

「この大淀、提督のためなら任務の補助から性処理まで全てサポートしてみせますよ？」

あ、そういえば今日いつもよりスカートのスリットを広くしてみたんですがいかがですか？もちろんノーパンです。横から見えます？」

「…。」

自分からスリットを広げて中を見せてくる彼女を横目で見ると提督は特に気にする素振りを見せることなく廊下を歩いていく。その反応に大淀は、あんまり反応よくないです

ね？なら今度は思い切つてスカート履かないとか…なんて呟いている。
彼女も他の艦娘同様、結構”アレ”であつた。

—————

「それでは提督、私は任務報告などありますのでこれで失礼します」

「ああ、頼んだ。：今日の秘書艦は誰だつたか」

執務室前で大淀に挨拶をして別れた提督はフウと一度軽く息を吐いてから執務室の扉を開く。

「ハア…ハア…ンン…ちょっと…！遅いわよつ、十分前行動が大人の基本でしょ？しつかりしなさいっ！」

「…。」

「ンア…なに？返事も出来ないわけ？このクズつ、なにか言いたいんだつたらちやんと言いいなさいよ!!」

「私の机に股を擦り付けるな」

「…」カクカク

～～～～～

「フウ…それで、もう任務報告とかは終わつたんでしょう？ならさつさつと書類仕事始めなさいつこのグズ！」

「…その前に布巾か何か取つてきてくれないか？」

「はあ？ なんでよ」

「お前が一番よくわかつてていると思うんだが…机が濡れていて書類仕事なんて出来る状態じやない」

机に座らされ書類仕事をするよう怒られる提督だが、謎の液体（意味深）で濡れてい る机ではなにも出来ないため霞に何か拭くものを要求する。

「アンタ、ハンカチくらい持つてるでしょ？ それで拭きなさいよ」

しかし霞は取りに行く気はないようで提督が持つて いるハンカチで対処しろと睨む。

仁王立ちで早くしろという態度を取る彼女を数秒見つめた提督は、諦めたように一つ溜息を吐いてポケットからハンカチを取り出し机の上に垂れる液体と机の角に付着した液体を丁寧に拭き取り、そのハンカチを机に置いた。

「仕事を始め…『ねえ、まさかその液体がナニかわからないまま仕事するとか言わないわ

よね？危険なものだつたらどうする気よ！」

…どうしろと？」

「な、舐めてみたら？あと匂い嗅いで」

「おい待て、お前は危険物の可能性があるものを舐めたり嗅いだりするのか？」

「うぐ…い、今時点で体になにか異変は起きてないでしょ？なら大丈夫よ、さつさと舐めなさいほらっ！」

テイスティングよつ！と意味のわからないことを叫んだ彼女は机に置かれたハンカチを掴み、椅子に座っている提督の背中へと飛び掛った。

飛びかかるれた衝撃に意識を向けてしまつたその瞬間、

「霞なにして…ッ！おい、その手に持つているものを離せ」

凄まじい勢いで白い布が自分の顔へと迫ってきており、それに提督はこれまで人間とは思えないような反応速度で彼女の腕を掴み止めて見せた。

「駆逐艦のちょっとしたおふざけじゃない、これくらい受け入れたらどうよツ」

「駆逐艦の中では随分と過激な遊びが流行つてているのだな、今度厳重注意が必要か」

「アンタだからやつてんのよつ！」

光栄に思い…あれシャンプー変えた？男の癖にこんな甘くていい匂いさせちやつてなんのつもりよまつたく…なに、そんなにパパにさせられたいの？

『お前はなにを言つてゐるんだ』

ああ、もう妊娠しそうっ!!』

後頭部に鼻先を埋めて興奮してゐる彼女に提督はなにも言うことはせず、ただ遠い目をして彼女を掴んでいた腕に再び力を入れ直した。

一航戦のヤバイほう

時刻はちょうどお昼を過ぎた辺り、提督は一人執務室で間宮が持つて来たお茶と羊羹を口にしながら束の間の安らぎを味わっていた。

「提督、失礼します！」

「失礼します。赤城さん落ち着いて、提督が喧しそうな目でこちらを見ているわ」
が、彼の安息の時間はと二切れ目の羊羹に手をつけようとしたところで終わりを告げることとなつた。

口をつけようとしていた羊羹を皿に戻し、こちらに近づいてくる二人の女性へと顔を向ける。

「いきなりなんだ赤城、加賀」

「お願ひがあるんですつ、食堂にあるお釜の数をもつと増やしてもらえませんか!!あ、美味しそうな…もちやもちや…羊羹ですねつゴクン…」

「食うな」

机の前へとやつてくるなりお茶請けの羊羹に手をつけるという暴挙に流石の提督も眉をひそめるが、赤城は特に気にする様子もなく最後の一切れを口に放り込んだ。

「…それで？」

「ズズツ…ここ最近、新しい子達が増えてきたじゃないですか？あの子達、遠慮して食事しているがするんです、だからお金の数を増やしてまだいっぱいあるよって見せてあげれば気なんか使わせずに食べさせてあげられるかなつて…このお茶いつもより美味しい気がしますね…」

提督の羊羹を食い尽くし、飲みかけのお茶にまで手をつけ始めたところでようやく本題へと入る。

つまり、

最近入ってきた艦娘たちが食事の際に遠慮が見られる。

入ってきたばかりの自分達が先輩たちの食べる分を減らしてしまうと思っているのでは？ならば食べられる量を増やせば万事解決。

他にも小さな子たちはもつと食べた方がいい、食事とは栄養を摂る以外にも英気を養うにも大切、ビタミンには13種類もあり様々な効果が等々、食の重要性とそれを行うことで生まれる恩恵についてペラペラとしやべり続ける赤城。

それを提督は何も言わず聞き、赤城の斜め後ろに立っている加賀もただ黙つて提督の

顔を見つめていた。

「特に駆逐艦の子たちは戦闘もしてもらつて尚且つ遠征も行なつている子もいますよね？ですから遠征などの効率を上げるためにも是非…」

「言いたいことはよくわかつた。確かに我が国を守るため日々頑張る貴様らが十二分な食事を摂るのは突然かつ必要なことだ。それにより効率が上がるのなら尚良し」

「で、では明日からでも!!」

10分に渡る演説を聞き終えて肯定的な言葉を口にする提督に提案が通つたと確信

した赤城は、目をキラキラと輝かせながら前のめりになりさらに提督に顔を近づけた。

口の端から涎を垂らす赤城に、普通ならまず見せないような柔らかな笑みを浮かべる提督。

「だがおかしいな…間宮たちからはいつも料理は余るほどで残りは毎回赤城と加賀、大人（戦艦や空母）たちが食べていると聞いているのだが？」

「…へつ？」

「…ん？」

執務室に訪れる沈黙。

「赤城」

ニコリと微笑んでいた提督の表情は一変、いつも以上の冷たい視線が送られると赤城はだらだらと汗を流し視線を忙しく彷徨わせ始めた。

あの子たちのために是非つ！ 真剣な顔は何処へ行つたのか、一生懸命言い訳の言葉を考える一航戦赤城。

果たして一航戦誇りとは一体：

「え、えっとそれはですね…あのう…あれです

そ、そう！ ほんとうは…つていいひやいひやい!!」

しどろもどろにいい訳をしていた赤城が突然悲鳴を上げる。

「ちよつ、な、なにしゆるんですか加賀ひやん！」

執務室に入つてからほんどの口を開かなかつた加賀が赤城の頬を抓つたのだ。頬を

さすりながら涙目で彼女を睨みつける赤城だが、加賀は呆れ顔で言葉を返す。

「嘘を吐いた罰です。

提督、赤城さんも悪気はないの、許してあげてほしいわ

「別にこの程度で一々腹を立てるほど子供ではない」

加賀からの謝罪にやれやれと首を振る提督。その反応を見てから加賀はさらに言葉を続ける。

「そう…良かつたですね赤城さん、お腹が空くからつてあまり提督を困らせてはダメよ

? 一航戦の誇り、ここで失うわけには：（笑）いかないでしょ？」

「むつ！ 加賀さんだつてもう少しくらい量が増えてもいいって言つてたじやないですかつ、第一ほんとは私より食べる『赤城さん、ご飯粒が』ほみ、あ、ああくにやんれもないれふうう！」

加賀の言葉にむくれた表情になつた赤城は反論をしようと口を開くが、今度は両側の頬を引つ張りこねくり回され何も言えずに半泣きで謝罪の言葉を繰り返すこととなつた。

「いい赤城さん、人にものを頼むのにはそれ相応の態度というものがあるでしょ？それを忘れては五航戦の子たちに馬鹿にされてしまうわ」

「うう…ごめんなさい～」

ぐにぐにと引つ張りまわした赤城の頬を離した加賀は『私の方からももつとよく言っておくわ』と、謝罪をして提督の真横へとやってきて、

そしていつも通りクールな表情のまま彼の手に自分の手を絡ませた。

「…気分が高揚します（めちゃ濡れ不可避）」

一体なんだと言いたげな顔を向ける提督、しかし加賀さん当然ながらそれをスルー。

感触を確かめるような手つきで絡めた指をにぎにぎとさせる。

「…とにかく食事の量が足りないのなら最初からそう言え。先程も言つたが日々命を懸けている貴様らが必要と思うものを与えてやるのは提督として当然のことだ、もちろん無理なこともあるし、必要な理由も聞くがな。だから次回から嘘など言わずちゃんと…」

「鎧袖一触よ」ずぼつ

「!?」

時間すればほんの一瞬の出来事。時間にすればコンマの世界だろう、提督が赤城を見つめ、瞬きをしたその一瞬で、彼の手は青い袴スカートの中へと誘われていたのだ。

「ちよつ、加賀さんツ!？」

流石の赤城も加賀の行動に顔を赤らめ声を荒げるが、加賀は気にする様子も見せず必死で花園から手を抜こうとする提督の手の甲を掴み無理やりに動かし始める。

「ここは譲れません」

「くッ…加賀、貴様　“また”…」

「私の格納庫に何か御用?んあ…大概にしてほしいものね」

「貴様がなツ」

執務室に不釣り合いな水音とも鈍い音が部屋に響き渡つた。

——数日後：

「ズズツツ……」

時計の針が進む音しか聞こえない執務室。

提督は一人、緑茶を啜り日々の疲れを癒していた。

日々の殺人的な仕事量に加えて少々“アレ”な艦娘たちの対処という心身共にハードな仕事をこなす彼にとつて静かな時間とは何にも代えがたい癒しの時間となつていた。鋭い目つきも今は心なしか和らいでいるように見える。

願わくばこの時間が永遠に……

「提督、失礼します!!」

乱暴に開かれた扉が提督を現実へと引き戻す。

短い静寂の世界に分かれた提督はいつも顔に戻り入つて来た艦娘に目を移す。

「赤城か…何の用だ」

「ほんとにお金の数増やしてくれたんですね!! あんなことあつたのに…」

先日の加賀暴走事件であれだけのことをしておいて、願いなんて絶対に聞いてもらえないだろうと思っていた赤城にとつてはかなりの驚きだったのだろう。表情からは嬉しさと何故? という感情が読み取れる。

「貴様たちの希望や願いを叶えるのが私の仕事、ただそれだけのこと。だが望めば与えられる子供になられてはこちらも困る、出来る範囲で良い、貴様の力を私に見せてみろ」

「くッはいっ!! 加賀さんは謹慎中ですけど一航戦の本気見ていてくださいね!!」

愛する提督からの激励の言葉に今まで感じたことのない幸福感を感じた赤城は、満面の笑みで頑張ります! と返事を返す。

それに釣られたのか、提督も僅かに微笑み

「ああ、期待している」と、小さく返すのであつた。

「そうです！忘れてました!! 提督にお礼したいと思つてお米炊いてきたんですよ、ホラホラこんなに美味しそう…」

しばらく談笑を楽しんだ後、忘れていたと持つてていた風呂敷からお櫃を取り出す赤城。今回のお礼として自分で炊いて持つてきていたのだ。

「白米だけか？まあ私は構わんが」

「ああっ持つてくるの忘れちゃいました！今日は新鮮な山芋が取れたから、ところかげご飯の日なんですよ、滋養強壮効果もあって提督にはピッタリです！白くて、ドロドロで本当に美味しいそうで…あつ

そういうえば提督、ところろで思い出したんですけど…」

食ザーって知つてます？」

「…………は？」

ほんわかしていた執務室の空気が一瞬で凍りつく。

「よいしょ……ご飯盛つて…、あのこの上に提督の精○かけてくれませんか？きっと美味しいと思うんですよね～」

「…赤城、今日はもう帰れ」

「え、なんですか提督！別にいいじゃないですか減るもんじやないし。それに提督の仕事は私達の希望や願いを叶える事なんですよね！じゃあこのご飯に精○かけてください！」

「たつぱり濃くてぱりぱりした提督の○液ツ

「赤城、謹慎処分」

ワンクールのレギュラーよりも一回の伝説

「提督見てくれっ!!ほらつどおーん!!」

夏の日差しが差し込んでいる執務室。

提督は机に置かれた書類に目を通し黙々と仕事を終わらせていくなか、そんな彼をよそに本日の秘書艦である初月は、自身のタietsに腕を突っ込み股間付近から突き出してはしゃいでいる。

B a b y B a b y B a b y B a b y B a b y B a b y B a b y B a b y

「僕のすべてはーお前のモノさー♪」

「何がしたいんだ貴様は」

「1日の秘書艦より永遠の嫁艦、伝説を作るぞ提督」

暫くすれば飽きて大人しくなるだろうと無視を決め込んでいた提督であつたが、初月アタック（ヒップアタック）から始まり左右狂い跳ね、シャチホコ立ちを披露したかと思ふと突然タiefsを脱ぎだし提督の顔に押し付けようとしたころでストップをかけた。疲れた顔の提督に真面目な顔で質問を返す初月、キリリとした表情でせつせとタiefs

をはき直す姿はなんともシユールだ。無言で見つめあう二人、執務室のどこから流れ
る続ける謎の曲…

ただお前だけ 抱きしめて そうさ 迷わず♪♪

「…さつきからこの曲はなんなんだ、どこから流れてる」

「ああ、明石に頼んで天井にスピーカーを取り付けてもらつた。隠しカメラのこと提督
にばらすと脅したら簡単に…あつ」

「今すぐ明石を呼べ、話がある。あと曲を止めろ」

「……ハア」

あの後、明石を呼び出しキツイ説教とお灸を据えてみたものの逆に悦ばせるという逆
効果に終わつた虚しさと、お灸を据えたことで出来てしまつた水溜まりの処理で提督の
疲労ゲージは真っ赤になつていた。

数個のスピーカーと十数個の監視カメラ、音響機器を外させて今後同じことをしたらもつと酷い罰を与えると脅しをかけてみたがあの表情、完全に逆効果になつていることだろう。

「随分と疲れているようだな、大丈夫か？」

「ああ、お陰様でな：いい加減スカートを穿いたらどうだ？はしたないぞ」

自然と零れ出る溜息と一緒に嫌味と彼女が執務室入つて来てからずつと思つていた事を口にする。

何故彼女は上半身はキツチリと秋月型の制服を着ているのに下半身はタイツのみなのか。

いつでも聞くことは出来たのだが、どうせ聞いても下らない返答が返つてくることをこれまでの経験で嫌という程知つてゐる提督は彼女の奇行と共に見ないように聞かないようしていたが、書類仕事も終わりいい加減やめさせようと注意をしてみる。

「これが僕の正装だ」

「…正装？」

お前は一体何を言つてゐるんだ。

言葉にしなくとも伝わつてくる、そうな表情を前にして初月は自信たっぷりに頷く。

「先日お前が僕たち艦娘も色々な世界を知る必要があると”てれび”という箱を買つてくれただろう? だから僕はその”てれび”に映る映像を見続けた。朝も昼も夜も、時間が許す限りだ…」

いや、極端すぎるだろなんて言葉が出そうになるのをぐつと堪えて彼女の話を聞く提督。

「兵器に娯楽など必要ない、無駄な知識を与えてどうなる、余計なことをするな」

そんな大本営からの返答に、提督が”わざわざ”^{テレビ} 単身乗り込んで行き勝ち取つてきた物がどのようにして眞面目な彼女をここまで変えてしまったのか、与えた者として知る必要があるので。

「朝のニュースからおかあさんといつしょ、昼ドラマに皆から借りた”でいぶいでー”と
いう円盤で男女の目合を食い入るように見たこともあつた。確かに新鮮だつたし楽し
むことも出来た、特に”でいぶいでー”のアレはかなり興味惹かれるものがあつた: だ
が違う!! 何故好きでもない男と女が盛りあう映像をわざわざ見なければいけないん
だッ、確かに見ながらお前との絡みを想像して自慰もしたこともある、それは認めよう。
だがリアルさが足りなくて不完全燃焼になるんだ:あの男が提督ならば見るだけで絶
頂まで達する自信があるのに!!: ああ、でももし仮にあの男が提督だとしたら僕は確実
にあの女を八つ裂きにして海にばら撒いているだろうけどな、フフツ:」

A V 女優

エロDVDについて熱く語り始めたかと思うともしあの男優が提督ならば行為をした女優を惨殺すると宣言、情緒不安定でかなり怖いことになつてゐる。

「そして先週の三連休、三徹目に差し掛かつて遂に僕は見つけたんだ、僕の心震わせ熱くする存在：奴を!!」

あの感覺は今でも忘れない、まるで初めてお前とあつた時の衝撃を思い出すかのようだつた、自分に足りないものがはまり込むあの感覺：

江○2：50との出会いが僕を変えた!!」

「○頭を知つてから僕は朝日晚、寝る時間を削つて奴の番組と“でいぶいでー”を鑑賞し続けている。昨日なんか24時間見続けた：ハハツ、今では僕自身が江頭○：50と言つてもおかしくないだろう：これから僕のことはハチちゃんと呼ぶがいい」

鼻息荒い初月に「潜水艦のハチが怒るぞ」と言つてはみるが、奴は似非ドイツ人で伝わるから大丈夫という始末。そして確かにそうかもしけないと少しばかり思つてしまつた提督は何も言えず彼女から目を逸らす。

彼女が異様なテンションに支配されることは江頭2：50を知つてしまつたからなのか、ただ単に寝不足の弊害なのか：まあ正直どっちでもいいが、大本営が言つた通り余

計なことしたのかかもしれないと若干の後悔もあるが、しかし彼女が戦い以外にも目を向けるものが出来たということに安心感を感じたのも確かだ。
まあ実際、彼女の頭の中が

提督 9割

江頭 1割

戦い 0割

というのは秘密だ。

「何に興味を持とうがそれは貴様の自由だ、没頭しても構わん。だかここが執務室であることや貴様は女性という事までは忘れるな、いいな?私はこれからこの書類を大淀に渡してくる、それまでにきちんとした服装に着替えてこい」

〔提督:〕

お前に一言物申す!!

「…なんだと?」

これで話は終わりだと立ち上がり執務室を後にしようとする提督、そんな彼の行く手を阻むように初月が大声を上げ、提督を指差した。

上手いこと話がまとまりかけているのにここで振り出しに戻すのか…、提督の努力も今寝不足ハイテンション初月の前では無意味だつた。

普通に戻りつつあつた執務室が再び初月ワールドへと塗り替えられていく。

「おい、お前エ…愛してるよお～!!」

「書類出しに行つていいか?」

下らないコントに付き合つてゐる暇はないと部屋から出ようする提督、それを初月2:50は組み付き全力で止めにかかる。せつかく身につけた芸を見てもらう前に逃げられては困ると必死なのだ。

「よし分かつた少し落ち着こう」

「誰か遊び相手が欲しいなら姉たちのところへ行つたらどうだ、気を使う必要もないだろう」

「僕はお前に遊んでもらいたいんだ、他の者ではなくお前にだ。

さあ今日この日の為に鍛え上げてきた技を見せてやろう『見たくない』見るんだ。おい、逃げるな引っ張るなっ!!

これ以上抵抗するようなら忠犬初月（自称）と呼ばれる僕にも考えがあるぞツ…」

「…ち○こしゃぶつてやる。」

「?」
「!」

「*ピーツ*しゃぶつてやるからな!! 24時間ひたすらしゃぶり尽くして干からびさせてやるからな!! それでお前に襲われたと鎮守府中にい言いふらしてやる!!」

シヤレにならないことを言い始めた彼女に戦慄する提督。

もしそんな話が彼女たちの耳に入れば大規模デモが発生するのはほぼ間違いないだ

ろう。

「さあ選べ、大人しく初月2・50のショードを味わうのか強姦魔というレツテル貼られ生きるのかをな」

――――――――――

「で、何を見せてくれるんだ?」

「制服早着替えチャレンジだ、お前が書類出して帰つてくるまでにこの使用済み提督服に着替える」

「おい、それどこから持つてきた」

「制限時間は20秒、それまでに戻つてこい…

よ、オオオ、しつ 行くゾオおお!!」

提督の言葉を無視していきなり始まつた提督参加型早着替えチャレンジ、まだ執務室にいる彼を気にする様子もなく制服に手をかけていく。そんな提督も大きく溜息を吐き、執務室から出たかと思うと全力疾走で廊下を駆ける。執務室から大淀の部屋まではそこまで離れてはいないものの、20秒以内となると結構本気でやらないと間に合うかどうかギリギリの線なのだ。

—20秒後…

「おい、開けるぞ」

見事時間内に走り切つた提督は少し曲がった帽子を直しながら執務室の扉を開ける。会話も一切なしに書類だけ渡して帰つてしまつたことは後で謝罪しに行こうと思いながら提督は部屋の中に目を向けると…

「あつ…」

「おい。」

全裸だつた。

「ちよつと早過ぎただけだ、次は1分にしてもう一回やろう」

「どうでもいいから服を着ろ」

「頼むつ、この通りだ!! 名誉挽回させてくれつ…お前が望むなら靴でも尻の穴でも舐めるから…」

「やめろ」

「これじや終われない…終われないんだあ!!」

全裸で土下座しながら足元にすり寄つてくる初月に冷たい視線を送り一歩離れるが、どんどんと距離を詰められ最終的には足に縋り付かれ

泣きながらの懇願を受ける提督…

正直この光景だけ見られたら確実に提督が悪い人間見えるだろう。

「…ハア、もう一度だけ大淀のところへ行つてくる。これが最後だぞ」「提督…つ!! 見ていてくれ今度こそはやり遂げてみせるつ」

—5分後…

「ハア…」

襟元に口紅、首筋には無数の赤痣を作った提督がひどく疲れた様子で執務室の扉に手をかける。

大淀のところで何があつたかは何も言うまい。

約束の時間から4分も過ぎてしまい初月は怒っているかも知れないが、流石にこれだけの時間があつたのだし普通に考えれば無事に着替えは出来ているだろうと考えている提督は、普通に扉を開けた。

「ア、ア…提督う…♡お前なんでそんなに優しいんだツ♡

スンスンツ…それにこんな良い匂いさせて…ハアツ!!ハアツ!!
イ、イぐうツ…つ♡ フウ…フウ…♡

あつ…

「おい。」

全裸で自慰していた。

感度3000倍 慰安艦娘と化した望月

「…朝か」

時計の短針が5を指すと提督の瞼が開く。

全身を包むような氣怠さを感じながらも身体と頭を覚醒させるべく、朝の冷たい空気を深く吸い込みそして吐き出す。

ばやけた視界をクリアにしていけばそこにはいつも通りの光景が広がつてくる。目の前に見える木目の天井

右に見える窓

左に見える棚と水差し

股間部に見える押し上げられた布団

「……」

え、なにこれ? とは口にしない。

提督も男性、当然” こういう生理現象” も起こるし経験している。

子供の頭1つ分はあるう膨らみを眺めながら、日頃の無理が積み重なつて遂に身体が

馬鹿になつてしまつたのか、それとも誰かしらにナニカ良くないものを……
モゾリ：

「ツ!?

ハア、と小さく溜息を吐きながら再び天井を見つめていると突然、股間の丘でもぞもぞと動き始めた。一人で動くソレに跳ねるように飛び起きた提督は勢いよく布団を剥ぎ取る。

そして、そこにあつたのは…

「んあ？…おー司令官もう起きのか、はよお〜」

長い茶髪に黒の制服。

眼鏡をかけた顔が一度こちらに向けられるが気の抜けた挨拶をすると、すぐに手元の携帯へと戻っていく。

「望月…何をしている」

「ん〜? 何ってゲーム、いくらクソ真面目な司令官でもやつたことくらいはあるっしょ??」

勝手に人のベッドに入り込んで人の股の間で何をやつてているのかという意味で聞いた質問は予想通り返つて来ることはなく、彼の股間を枕にだらだらとゲームを続ける。

「あ、あ〜加賀さん出ねえ〜、まじ泥濘すぎね？ いい加減禿げるわ…あつ燃料も終わつたし」

やつてらんね」、と携帯をベッドの端へと放つた望月は猫のようにお尻を突き出し伸びをすると、胡座をかいてベッドに座る提督の足元へと転がった。

「…何故貴様は私の布団潜り込んでいたんだ」

「んえ～？いやあ今日秘書艦の日だしさ、起こしに来たんだけど司令官起きないから布団潜つて待つてた感じ。つか司令官疲れすぎじゃね？たまには息抜きとかもしたほうがいいよー私みたいにい」

「……」

あまりにも似合いすぎるドヤ顔に、お前はもう少しシャキッとしたろという言葉が出そうになるが、わざわざ起こしにきてくれたという事もあってビックリするからこういう事は今後控えるようにと言うだけに留める。

「そろそろ起きるぞ、おふざけはここまでだ」「んにゃ♡髪触んなツンオ、つ♡」

予想以上に失つてしまつた提督は時間を少しでも取り返すべく、彼女のボサボサな長い髪を手櫛で整えてテキパキと身だしなみを整えてあげていく。
提督が髪に触れるたび甘い声と女の子らしからぬ声をあげてビクビク痙攣を繰り返す望月を無視すること数分、しつかりと髪が整つたことを確認すると仕上げとして少し

ズレた眼鏡を直す為、手を伸ばそうとして、なにやら彼女の口の周りがやけに汚れていることに気がついた。

「口の周りが酷いことになつてゐるぞ……なんだ、これは……」
口の周りのソレを人差し指で掬つてみる。

唾液と混じつた白濁の液体

これは……

「はむつ……じゆるるつ!!」

「ツ!?」

提督が確信へと迫ろうとしたとき、目の前で蕩けた顔を晒していた望月が一瞬で消え、次の瞬間には液体が付いていた指に吸い付いていた。

丁寧に指に舌を絡めた後、ちゅぴつ……と、なんともいやらしい音を立てて指を離した。望月は何度か咀嚼をした後ゴクリと喉を鳴らした。

「くちゅ……くちゅ……」くつ、ハア……いやあ”朝ご飯”ついてたみたいだわ、さんきゅーしつれーかん。それより仕事しなくていいの? やらないなら別に私は楽だからいいけどさあ~」

「…顔を洗つてこい、さつさと始めるぞ」

――――――――――

「しれーかん、そこの書類の束どうするー？」

「それは見終わつたものだから扉近くの机に置いといてくれ、後で大淀に届ける」

「うえくい」

仕事を始めて4時間、まるで高層ビル群のように積み重なつていた書類は提督の尋常ではない処理速度によつてあと数枚ほどで片付くところまで来ていた。

「望月の書類選別のおかげで随分と早く終われそうだ、助かる」

「べつづに、仕事なんて頑張つてやるもんじやないしさあ、樂する為に頑張るのが基本つしよ？」

提督の感謝の言葉に欠伸をしながら答えた望月は、手に持つた書類の束を机に置くと「こんだけ量あると書類運びだけでも結構ダルいよね」と零しながら自分の定位置である提督の横にある椅子へと戻っていく。

「つーかなんでこんな急いでやつてるんの？ 昼前までに終わらせる必要もないつしょ？」

「…今日は間宮のスイーツデーというやつなのだろう？ 午後は全艦にも休暇を与えるようにしてある、姉妹で楽しんで来なさい」

「…んへえ～ほんと甘々だよね、なに？ 司令官は砂糖と生クリームと素敵な何かで出来てんの?? ないわーほんとさどうかと思うよ」 いうことしてくんの～：聞いてんかオラ～」

糖尿病にする気かよ、なんて言いつつも提督の腕に戯れ付いて頬ずりをする望月。

モニモニと柔らかな頬が顔に押し付けられ、その温かな体温を心地いいと感じる反面、仕事をするのにひどく邪魔だと思っている提督は若干強めに彼女の頭を撫でる。
「これで終わりになる、少し大人しくし……」

「ンギイ～♪あつアツ…アア、ツ～!!～んおおお、…いぐつ!!」

「…朝から思っていたんだが、私が触れるたびに奇声をあげるのは何か理由があるのか？ もし私に触られるのが嫌だつたのなら今後からはしないようにするが…」

頭を撫でるたびにガチガチと歯を鳴らしながら激しい痙攣と嬌声を発し続ける彼女。それを流石におかしいと感じた提督は一度撫でていた手を止めて、涎を垂らしながらア

へ顔を晒らす望月へと声をかけた。

「ア、グウ～…♡ンウ…♡

ベ、べつに嫌じやねーし。ただ最近、しれーかんに触られるとフーッ♡フーッ…
身体子宮があツビリビリつてなつて♡頭も真っ白に…」

「今すぐ明石に診てもらいに行くぞ」

「お、つ!?し、しれい、か♡やめ、そんな強く掴まれたらあ、!!」

彼女の身体に異常があると分かつた瞬間、提督の動きは早かつた。

顔を真っ赤にして震えている望月を抱き上げると、早足で扉へと向かう。

ガツシャーンンッ!!!

両手が塞がつてて開ける事の出来ない扉は提督の全く躊躇いのないヤクザキックによつて吹き飛び、廊下の壁に激しく叩きつけられて只の木片へと早変わりする。

「貴様たちの体調には十分気をつけていいると思ひ込んでいた自分に腹が立つ。すまない、辛いと思うかもしれないが少しだけ我慢していくくれ」

自分への怒りが収まらない提督はギリリツと歯を軋ませると、凄まじい速さで廊下を駆ける。

「～～～ツ♡!!!」

望月の下半身から垂れる液体を残しながら…

— (:3) < —

「ふむふむ、触診や症状、検査からしておそらくこれは…」

提督液の過剰摂取が原因ですね!!」

「…なんだと?」

「だから提督液の過剰摂取です」

「……は?」

明石の売店兼医務室へと駆け込んだ提督は彼女の謎診断に、お前は一体何を言つているんだ?と言わんばかりの顔を向ける。

「眞面目に答えろ」

「いやいや、大眞面目ですっ！提督が彼女に触ると起きる異常な感度上昇、これは間違いない提督液の過剰摂取による症状です。ほら、私が望月ちゃんに触つても特になんともないでしょ？ちなみに彼女自身から提督へ触れた際も特に反応はしなかつたと思いますがどうですか？」

「…」

たしかに朝ベッドに潜り込んでいた時も、仕事中頬ずりしてきた時も、彼女から触れてきた時は普通そうにしていた。

試しにベッドに寝かせた望月の横腹を軽くすぐつてみると…

「んおおお、♡！」びちゃちや！！

「ああつ!? 私の仮眠ベッドがあ～！」

白いシーツに濡れシミが広がった。

「提督液っていうのはなんだ」

「えつ…!? ま、まあ艦娘専用（この鎮守府専用）

サブリみたいなものですよ。飲むと身体機能が上がつてお肌もツルツルになるしなんか身体中からキラキラが溢れるんですよ、まあ飲み過ぎるとあんな風になっちゃいますけど…」

「…とくに命に別状はないんだな？」

「えつ？　はい、提督に触られるとイつちやうぐらいですね。まあ触られるたびに死んじやうくらいの快感が彼女を襲つてると思いますけど…、検査のデータでは性感度が3000倍位まで上がつちゃつてましたし…でもどれ位の快感なんでしょう、少し興味あります」

何か重篤な病なのではないかと慌てていた自分がひどく馬鹿みたいに思えてきた提督は、安心と呆れの混ざつた溜息をこぼす。

明石の言つている事がほとんど理解出来ていらない提督だが、望月が無事（？）ならそれで良いと自分を納得させる。

ちなみに感度や3000倍という言葉はあえて聞かないことにした。

「望月ちゃんも提督液は用法用量を守つて飲まなきやダメよ？　感度3000倍なんて普通じや有り得ない数値なんだから、牝豚娼婦にされちゃうわよ？」

「あ、～♡やつぱ原液は市販の提督液とは強さが違つたわ…飲んでから結構時間経つのに全然高揚感が治んねえ」

「えつ！？嘘、もしかして直飲みしたの！？な、何回？！」

「二回、顎外れるかと思つたけど…すごかつた」

「おつほ♡ちよつと提督！こんか小さな子に直飲みさせたんですか?!なら私にもさせてくださいよ!!」

二人でなにやら話していたかと思うと、明石が大きな声を出しながら提督へと詰め寄っていく。

まつたく話を聞いていなかつた提督には何がなんだか分からぬまま興奮して近づいてくる明石の話を聞くしかなかつた。

「望月ちゃんにフ○ラさせて『ピーツ』液飲ませたんですよね!?

私なんて毎回起こさないように採集するのが精一杯で匂いしか味わえないのに…ずるいです！ずるいです！私にもフエ○させろーー！」

「…。」

「あ、明石さん…アタシも寝てる時に…」

「…ふえ？」

「明石、提督液について詳しく聞きたいんだが…いいな？」

「あ、でででえ〜!!」

素つ頓狂な声をあげた明石の顔面をがしりと掴まれミシミシと音を立てる。

「あと望月、どこへいくつもりだ…まだ調子が悪いのだろう？そこで寝ていろ、二度としないと思うくらい今日は触つてやる。覚悟しておけ」

「うつはーい♡」

この後、間宮スイーツデーで静かになつた鎮守府に二人の”叫び声”が響き渡つたとかなんとか：

そして提督の寝室には何個もの鍵が付けられるようになつた。

朝潮の拳

コンコンツ

深夜12時、シンと静まり返つた寝室にノックの音が響き、1人の少女が入ってきた。

「マルマルマルマル！」

本日秘書艦担当の朝潮ですっ

よろしくお願ひします!!司令官、ご命令を!!」

セクシーランジェリーに身を包み、ピシッと敬礼を決めた朝潮は提督が寝ているベッドの横まで来ると、キラキラと輝いた瞳で彼を見つめて指示を待つ。

「……ああ、よろしく頼む。で、こんな夜中に一体何のようだ、後どうやつて入つてきた」体を起こし、眠たそうな顔で挨拶した提督は朝潮の顔を見た後、続けて彼女が入つて来た扉へと目を向けた。

この前のことがあつて提督の寝室には何個もの鍵が取り付けられており、正直彼が開ける以外では破壊するほか通る方法はないほどだつたのだが：

「申し訳ありません！秘書艦として一秒でも長く司令官のお側にいたくて、扉は…司令官のこと想つていたらいつの間にか開いていました。愛の力でしようか？えへへ…」提督の質問に照れくさそうに笑う姿はなんとも可愛らしいのだが、提督に見えないよう持つてゐる”特殊そうな工具”がそれを半減させていた。

どんどんと重くなつていく瞼をなんとか気合いで開けている提督は、自分の指示をまだかまだかと待つてゐる朝潮を眺めて、どうしたら大人しく部屋に戻つてくれるだろうかと考える。

きつと真面目で賢い彼女のことだから一言、「眠い」と伝えれば睡眠の邪魔をしてはいけないとすぐに帰つてくれるだろうと思つた提督は口を開く。

「どうか、仕事熱心なのは良いことだ…では一つ指示を出す。

今日の秘書艦の任をしつかりこなせる様にゆつくり休んでおきなさい、私も疲れを残したくないから寝かせてもらう」

「はいっ、わかりました!!それでは朝潮、休息を取らせていただきますっ失礼します!!」「ああ…ゆつくり休みなさい…」

朝潮の声を聞きながら、毎回こんな感じにすんなりと終わつてくれれば良いのだがな

…と、提督は心の中でため息を吐いた後ようやく瞼を閉じた。
朝になればまた始まる騒がし過ぎる1日を想像しながら…

「ごそり…

「んしょ、…あつたかいです」

「おい、なんのつもりだ」

何故か普通にベットの中へと入つて来た朝潮にすぐさま反応する。
まさかの展開に提督もビックリである。

「えっ？ 休みなさいと言われたので…

んんつ。司令官の腕、硬いですけど抱きついているととっても安心します…」

提督の腕を抱き枕がわりにしてウツトリとした表情を見せる朝潮。

抱きしめられた腕には見た目相応の膨らみが押し付けられ、彼女の鼓動や体温が伝
わつてくる。

「…。（私は自分の部屋へ戻つて休めと言つたつもりなのだがな、とにかく無理矢理にで
も…ツ！ 腕が…動かない…？）

普段なら彼女の体重なら片手程度で（やらないが）振り回すぐらいワケない提督なのが、いざ腕を引き抜くため力を入れようとしてまるで力が入らないことに気がつく。

「フフツ…今、司令官の腕は私の制御下にあります」

「…………は？」

朝潮の言葉に多くの？マークを浮かべる提督。

しかし無理もない、このお話はラブコメ世界：いきなりバトル漫画みたいなことを言
われてもこんな反応になるのも当然のことだ。

「私が体内で練り上げた”氣”を司令官の腕：神経系統に直接流し込むことで…ホラこ
んな感じに」

「つ!？」

その声を合図に、彼女が履いている下着としての機能を果たしているのか不明なレー
ス生地のTバック：そのクロッチ部分を指の腹で擦り、揉み込むような指使いを始め
る。

自分の意思とは無関係に動く指は秘裂を覆つた薄布を無遠慮に引っ搔き、布のさらによ
奥にある”大切な所”へと入り込もうとして、だんだんと指が深く押し込まれていく。

「すゞつ♡いです、司令官の指い…こんなツン。ン!!」

どんどんと行動が大胆になつてきた朝潮にこれ以上は不味いと判断した提督は、多少乱暴になつてしまつことを覚悟でもう片方の腕を使つて引き剥がしにかかる。

が、時すでに遅し、

一瞬の思考停止が勝敗を分けた。

「…。(完全に動けなくなつた)」

今ここに提督型手マ○マシーンが誕生した瞬間である。

「ンツ♡ン、ツ♡んい、うう!!さ、流石 司令官です…見事な、あんつ…これ以上はダメですつ…♡」

指が這う度に朝潮の口からは絶えず喘ぎ声が発せられる。

それはさながらマエストロによる名器を使つた独奏を思い立たせ…
「音すゞつ♡くちゅくちゅつて…イツ、いイヽツ♡」

なかつた、やはり只の手マ○である。

ジユワリと溢れ出てくる”熱“が中指と薬指に絡み付いていくのを感じながら、提督はどうすればこの状態を打破する事が出来るか考える。

身体の自由は効かず、元凶の少女はガクガクと腰を痙攣させてもうすぐ興奮のピークが近いことが見て分かる。

このままでは絶頂を迎えた彼女がお前がパパになるんだよっ！なんて言い出すのも時間の問題だろう。

「ハア…ハア…♡あ、危うく朝潮からングつ…夜潮になつて…」

「お前は一体何を言つているんだ」

「い、今のは…ハア…ツ…ツ♡私の名前と潮吹…『わかつたもういい』フウ…フウ

…♡」

「ハア…普段は真面目なのに何故こうなる…ん？」

くだらない下ネタを軽く受け流したところで提督はふとあることに気がつく。

先程まで朝潮によつて奪われていた身体の自由が少しではあるが戻つてゐるのだ。先程までプロピアニストも驚愕の指さばきをしていた右腕も今はすつかり落ち着き、動かなかつた口もいつも通り変態の言葉を遮れるほどには回復している。

「（奇妙な技の効力が弱まつたのか…？しかし何故だ？）」

理由を知るために朝潮のほうへと顔を向けてみる。

真つ赤な顔、潤んだ瞳で必死に歯を食いしばりナニかを堪えているような表情…つまり、これは：いや、ここまで読んでくださった読者の皆様は皆まで言わなくともなんとなく想像がついてしまつてているのではないだろうか。

少なくとも提督はなんとなく察したのか、すごく微妙な表情を浮かべている。

もしかして：マジイキ絶頂

「（どうやるかは置いておいて、朝潮の集中力を途切れさせれば身体の自由が戻る可能性が高い：どうする、下手に動けばまた同じことの繰り返しだ。ここは慎重、確実に…ツ）おい、どこを触つている」

グワシツ

様々な状況を想定して脳内シミュレーションをしていた提督は突然の衝撃にハツと顔を上げる。

彼女の小さな手が服の上から提督の単装砲を掴んだのだ。

「ツハア～♡…パパになつてください司令官」

予定調和、

約束された勝利の言葉が熱い吐息と共に放たれる。

さつきまでの蕩けた瞳はどこかへと消え失せ、ギラギラと情欲に支配された瞳が提督の顔を写し込む。

「この朝潮、司令官の赤ちゃんでしたら喜んで孕む覚悟です。

どうですか？朝潮の手で気持ちいい、ですか？」

たどたどしい彼女の攻めを股間に受けながら提督は只々、目を閉じてされるがままになる。

もちろん諦めた訳ではないし、提督のエクスカリバーがカリバーンするのを堪えるためでもない。朝潮が軽くイツた際、たまたま微かに感じた”氣の流れ”の感覚を掴もうとしているのだ。

実際、この絶望状況を打破するには彼女の氣操作を攻略する以外方法はないだろう。出来なければ提督のエクスカリバーがアヴァロンに收められ、朝潮のお腹に理想郷が築かれてエンディングを迎えることだろう。

「フーッ♡フーッ♡」

興奮のピークを迎えた朝潮は布越しに擦るだけでは満足出来なくなつたのか、ついに最終防衛ラインである下着の中へゆっくりゆっくりと侵攻を開始する。

それでも尚動こうとしない提督。もはやこれまでか、R18版の執筆を開始しようとしたその時、

ガシイツ!!!

「なつ?!

下着の中に入り込んだ手が掴まれた。

「まさか身体の動きを止めるだけでなく、操作するとはな…驚かせてくれる」

「くつ、司令官の”氣”の流れが変わつた…まさかこの短時間で操れるように?…流石は朝潮のだんな様です」

「なつた覚えはない」

「ですが負けません! 司令官には今日ここで種付けをしてもらいますっ朝潮の全身全靈、行きます!!

ん〜〜ツ!!

言葉通りの全身全靈。朝潮が力を込めた瞬間、全てを飲み込む激流の如き一撃が提督

へと襲いかかる。

提督の為ならば自分の守るべき国へ何のためらいもなく銃口を向けられる彼女が、その提督へと死にはしないが確実に意識を刈り取るそんな一撃を放つたとなれば今回のガチさが理解出来るだろう。

ビクッと、電気ショックを受けたかのように身体が跳ね上がる提督の姿に勝利を確信した朝潮は口元に笑みを浮かべる。

「朝潮の勝利ですっ！赤子の手を捻るようなことはしたくはありませんでしたが、これも司令官との種付けS○Xのため…致し方ないことな『朝潮、こんな言葉を知つているか？』ツ??！」

「激流を制するは静水」

テーレツティー（処刑BGM）

：どうやら長かつた夜もそろそろ終わりが近づいてきたようだ。

荒れ狂う激しい流れも湖へと入り込めばいずれは勢いを失っていき、飲み込まれてしまう。

提督は激しい氣の流れに敢えて逆らうことなく身を任せ、同化することにより彼女の

剛氣を受け流してみせたのだ。

「あ、あり得ませんつ朝潮の剛の拳（？）が効かないなんて…も、もう一度です
食らえ！（ぐちゅつ）…ほへつ??」
ぶしやああツ…

再び氣を使おうとした瞬間、朝潮が素つ頓狂な声とともに**体液**
激しく痙攣を繰り返す彼女は一体何が起きたのか分からぬ様子。

「氣の操作にはかなりの集中力が必要なのだろう？」

「こうすれば氣を使えまい…いい加減寝かせてもらうぞ」

くちゅつ ぬちい… くりゅつ

「あ、つ!!しれーかつ 朝潮のおまん

(ぐちゅちゅつ!!) さわってええあぐうツツ

「喜べ、貴様がちゃんと寝られるまでしつかりとシてやる」

「そん、なつこわれりゆつ!! イクつ…アグつ

手とめてくだつ…ツ!!!ア、ツア、ツ

やめ、こわれ…」

「氣でもなんでも使つて止めてみろ」

「あぎいつかはつ…あ…」

「…おやすみ、良い夢を」

♪翌朝

執務室

「おはようございます提督、本日の書類を…あら？ 朝からお盛んですね。執務室入った瞬間、提督が対面座位してた姿なんて他の子が見たら卒倒しちゃいますよ？」

「…。」

執務が始まってすぐに睡魔に負けた朝潮を起こさぬよう今日も提督は書類の整理を始めるのであった。